

## 1. 河川遡上計算の考え方

津波の河川遡上の計算は、河川の流量を考慮しない基本的な手法で行うが、河川流量が津波遡上に及ぼす影響を確認するため、モデル河川を選定して河川流量を考慮した場合の遡上計算も実施する。モデル河川での検討の結果、河川流量を考慮する必要があると判断された場合はシミュレーションの実施条件を満たす河川に対象を広げて、河川流量を考慮した遡上計算を実施する。

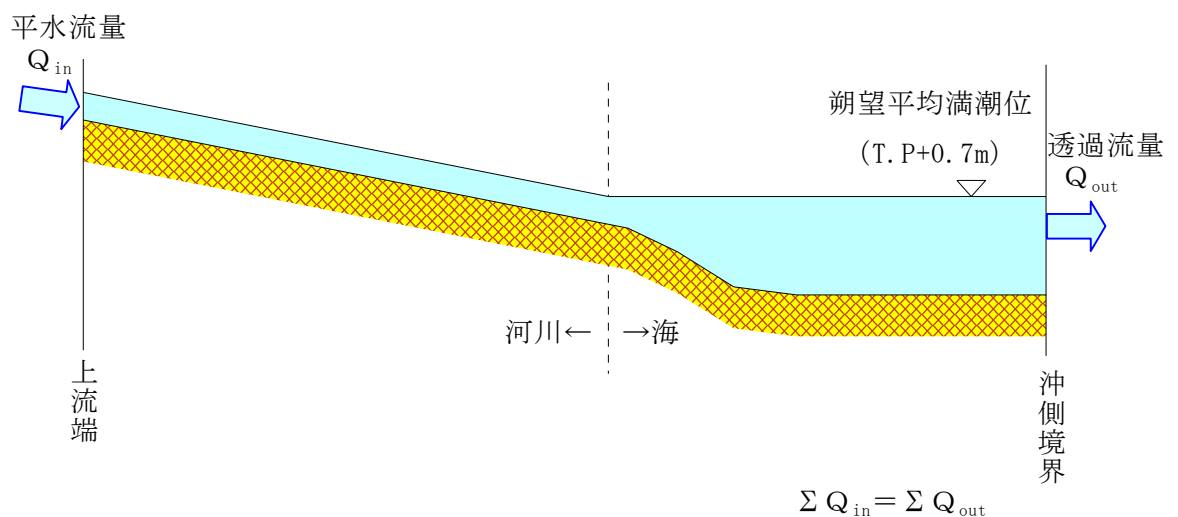
以下、河川流量を考慮する場合の手法と、河川流量を考慮しない場合の手法について説明する。

## 2. 河川流量を考慮する場合

### 2.1 シミュレーションの手順

海から河川まで一連のデータモデルとし、つぎの手順でシミュレーションを実施する

- ・河川の上流側で津波遡上の影響を受けない地点から平水流量を流す
- ・海の沖側境界を透過境界とし、川と海が定常状態に至るまで計算を続ける
- ・つぎに地震・津波を発生させる



### 2.2 シミュレーションの実施条件

- ・河道の縦横断データがある
- ・流量観測が実施されている
- ・河口から急勾配であったり、河口幅が小さくなる場所は適用外とする

### 2.3 モデル河川とその適用

大北川（高萩市）を対象として、河川流量を考慮した場合と考慮しない場合の予測結果の比較を行い、適用の可能性を探る。その結果、必要であれば、その他の河川を予測対象に加える。

しかし、現在国土交通省は新たな評価手法を検討中とのことから、今後、その新たな評価手法に基づき詳細に調査されると考えられるため、直轄河川については河川流量を考慮しないものとして整理する。



### 3. 河川流量を考慮しない場合

簡易的につぎの手法を適用する。

- ・ 地震発生前、河道内の干潮域では潮位面まで水で満たされており、それ以上の標高帯には水がないものとする
- ・ 潮位は朔望平均満潮位（T. P+0.7m）とする

